



南海研だより

No. 22

1992年 2月

サイモン M. ソーレイ博士を迎えて

中野和敬（南海研センター長事務代理）

昭和63年度に南太平洋海域研究センターへと改編されて以来文部省へ外国人客員研究員1名を予算申請していたところ、平成3年度よりそれが認められたので、平成3年12月24日、本研究センターにとって最初の外国人客員研究員サイモン M. ソーレイ博士が客員助教授として着任した。研究員1名につき、オセアニアに関してなら実質的にどのような課題でも3か月以上1年まで本研究センターで研究活動が行なえることになっている。従って、今後本研究センターに定員として外国人1名が常時研究の任にあたることも不可能ではないのであり、実際は本研究センターの規模拡大が成ったとも言い得る。その意味でも、このソーレイ氏着任の持つ意義は大きなものであろう。

国立大学の学部には所属しない付置研究所または研究センターで、海外の地域研究を旨とする施設は大抵外国人客員研究員の定員がついており、本センターも他と同様外国人客員を迎え、研究活動の質的向上への良い刺激となるよう長年切望していたので、それが成就した喜びは大きい。そしてソーレイ氏が上述の本センターの趣意どおりの役割りを立派に果たしてくれるものと大いに期待している。なお同氏の任期は平成4年3月23日までとなっている。

ソーレイ氏はパプアニューギニアの西ニューブリテン州生まれで37歳、1976年パプアニュー

ギニア大学理学部生物学科卒業後同大学の上級コースを1979年に修了、その後すぐカナダのウォータールー大学修士課程に入り、1981年に修士となった。そして1982年よりスコットランドのアバディーン大学博士課程で学び、1985年博士の学位を取得した。専門分野は植物生態学で、博士論文の主題はパプアニューギニア熱帯低地林伐採後の自然植生の回復過程についてであった。現在、パプアニューギニア大学理学部上級講師の任にある。本研究センターにおける研究課題は「焼き畑あと地における自然植生回復の解析的研究」で、私と共同研究を行なっている。

パプアニューギニア大学と本研究センターは平成元年に研究及び教育協力に関する合意書を交わしており、特別に緊密な関係にある。本研究センターへの最初の外国人客員研究員が同大学より来たことは、この意味でも特筆すべきであろう。今後同大学との一層の協力関係増進が期待される。

さらに、オセアニア地域が専門領域の研究者を次つぎと客員研究員として迎えることで、そのような国々との研究者との間のパイプが太くなり、本研究センターがオセアニア研究に関して国際的に確固たる地位を築いたと言えよう。

次のページにソーレイ氏本人からのメッセージと写真を掲げる。

サイモン M. ソーレイ氏よりの メッセージ



サイモン M. ソーレイ氏

I have published a number of articles in numerous International and National Journals and books as well as producing a number of reports for both the Government and the timber industry. I have travelled to a number of countries in South-east Asia, Japan, USA, Australia, New Zealand and United Kingdom either as a country delegate or as an individual to present papers at the meetings. Most of my papers are about tropical forest ecology and dynamics as this is the area of my interest and research.

Apart from my teaching and research activities at the University of Papua New Guinea, I have been engaged by the Government and the timber companies to carry out a number of Environment Impact assessments on various timber operations. Currently I am assisting the Departments of Forests and Environment & Conservation in getting their research programmes going under the National Forestry & Conservation Action Plan through the assistance of the World Bank.

I strongly believe that the current collaborative research programme between our two institutions should be continued and strengthened. There are lots of things yet to be done and we all can benefit from such

collaboration in terms of sharing information and ideas. In the forestry sector in Papua New Guinea, for example we still have very little knowledge and understanding of the ecology and the dynamics of the various types of forests we have, thus we are uncertain about the sustainability of the resources under the present management system we are using. This is similar in other sectors such as fisheries and agriculture. I hope that the research collaboration between our two countries will expand the database and information which are currently limited or lacking to enable the decision makers, developers, users/owners to make appropriate decisions for developing and managing or conserving the forest resources or other renewable resources on a sustainable basis both for the present and future generations.

I am very grateful for being given this opportunity to visit Kagoshima and the University Research Centre which are quite impressive and beautiful, but the weather has not permitted me to venture very far. Nevertheless, once I get acclimatised I will visit some of these sites which I have not seen.

I am greatly indebted to the following people for making my visit possible: Professor Akihiro Igata for his invitation to come to the University, the Director of the Research Centre Professor Shin'ichi Terashi and both Professors Kazutaka Nakano and Akio Inoue of the Research Centre for their various assistance; last, but not the least to my former Vice-Chancellor Professor John Lynch, the Dean of the Faculty of Science Professor Lance Hill and to my Departmental Head Dr. Ian Burrows for allowing time for me to come to Kagoshima.

1991年度特定研究

調査隊長 林 満 (農学部)

「パプアニューギニアの人間と環境」をテーマとした南太平洋海域研究センターの1991年度の総合学術調査隊は、学内隊員17名、学外隊員1名、事務官1名、教務補佐員4名の総勢23名で編成された。そして、調査はおもにパプアニューギニア島の東部及び北部の Morobe, Madang および East Sepik 州、それと往復の航海中の海上で実施された。

初年度の1989年に南海研センターとパプアニューギニアの2つの国立大学との間に学術研究の交流協定が結ばれ、また、本年度から南太平洋を研究対象とする研究者を南海研センターに客員研究員として招聘することも出来るようになったこともあって、現地の機関の研究者との共同研究がこれまでよりもより緊密な関係のもとで行われ、かなりの成果が上げられたようである。さらに、本調査がパプアニューギニアを対象とした3年計画の最終年度に当たったために経験者が多く、すべての調査活動が無事故で無事に終了できたのは何よりであった。

班の構成および日程は下記の通りであった。

第1班：農業と土地利用 (林 満, 中野和敬, 根建心具, アントニオ・サラビア), 第2班：沿岸海域の増養殖資源 (榎本幸人, 井上晃男, 川村軍蔵, 内尾康人, 岩川哲夫, 臼田和吉, 安楽和彦), 第3班：病原ウイルスの疫学 (寺師慎一), 第4班：伝統社会システムとその変容 (田島康弘, 皆村武一, 柄木田康之), 第5班：熱帯外洋域の環境 (湯脇康隆, 嶋田起宜, 益満侃, 市川敏弘, 八田明夫, 東政能, 神谷享子), 事務局 (竹之内則好)。

日程：11月1日鹿児島島出港, 11月11日Lae (Morobe州) 入港, 11月19日Lae 出港, 11月21日Wewak (East Sepik州) 入港, 11月27日Wewak 出港, 12月6日鹿児島島帰港。この間の

11月18日と11月25日にはLae及びWewakで、それぞれの地域にある大学や政府機関などの関係者を約80名ずつ招待して、レセプションが船内で盛大に行われた。また、往路における海洋調査が台風24号の影響のために十分に行えなかったため、当初計画の日程を一部変更して復路においても海洋調査が行われた。

今調査の成果は、4月の特定研究報告会で発表され、秋には南海研センターの Occasional Papers で Progress Report として刊行される予定である。

1991年度 パプアニューギニア調査に参加して

榎本 幸人 (神戸大学理学部)

学外教官の身でありながら厚かましくも1983年, 89年, そして今年と3回の調査に参加させて頂いた。

前回, 前々回と同様, 海藻類の植生を調査した。ウェワクでは, 村落における漁業を調査された水産学部の川村先生のボートに便乗させて頂き, 途々, 海藻を調査・採集した。その折り, 小さな島に点在する集落の生活を垣間みる機会に恵まれた。以前の調査では経験しえなかったことである。集落と言っても小さなものは2, 3戸, 大きくても30戸に満たぬものである。

椰子葉で葺いた住居の内部も求めに応じこころよく見せてくれた。驚くほど簡素な造作であり, また少ない所帯道具である。文明の利器と言えはランプと二, 三の炊事用のアルミ鍋と簡単な大工道具とナイフ位のもので, 殆ど財産らしいものは見当らない。およそ近代文明とはほど遠い存在である。

一見して人間の生活とも思えないような簡素・単純・単調な暮らしの中で、彼らのだれもが彫り出す木彫品が不思議に思われる。日々の暮らしに使うカヌーの櫂の柄にさえ幻想的と言うべきか、怪奇的と評すべきか、見事な彫刻をほどこしている。そのまま既に美術品と言えるほどのものもある。

彼らのあの淡々とした原始的とも言える生活の中から、どうしてあの様な美的感覚にあふれた彫刻が生まれてくるのか。彼らはこの物理的空間の現実世界とは別に、もう一つ、己の内にイメージの世界をもち、それを物体化し、具体化することを生きざまにしているのであろうか。私にはそうした豊かなイメージの世界も、具体化の方法の持ち合わせもない。南太平洋諸島群の中で、ニューギニア・アートが格段に高く評価されると聞かすが、それは少数の芸術家によって生み出されるものではなく、一人ひとりの暮らしの中から創り出され、支えられているものなのだろう。彼らの作品には決してサインは見られない。

やがて、彼らもまた文明化の波に洗われ、近代化されてゆくであろうが、そのとき、いつまでも変わらぬイメージの世界を持ち続けるであろうか。己の専門分野の調査の結果もさりながら、輝く太陽のもと、彼らの生活を想い浮かべるとき、今にして、なお考えさせられるものがある。

「Voice of the Voiceless」 in P.N.G.

— Wewak での体験から —

田 島 康 弘 (教育学部)

表題の「Voice of the Voiceless」は移住者集落の諸問題にとりくむある団体 (NCUS) の機関紙の題名であるが、この件については別の機会に譲り、ここでは筆者がウェワクで直接面会した3人の人の意見の紹介を通して、「声なき声」の一端にふれてみたいと思う。

最初の人 は East Sepik Agency で働く A 氏

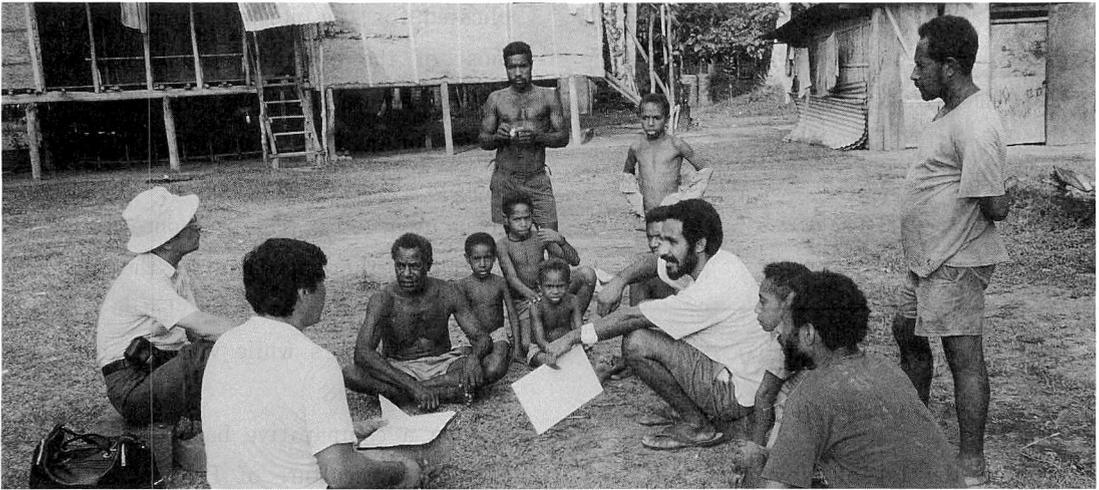
の主張である。彼はこの国の政治家を批判する。すなわち、政治家たちは自分や自分の一族のためばかりに金や力を使い、一般の人々のためになることはあまりしないと言う。それでいて選挙になると自分に投票するように金をばらまく、とどこかの国とあまり変わらないような事を筆者に言った。

2番目の人は筆者が調査した集落のリーダー格の人の意見で、彼には長い役人経験もあり、この国の状況をすどく認識していた。彼との話は集落の若者小屋の中においてであったが、平日の昼間であるというのに、そこに横になってゴロゴロしている数人の若者達を指差しながら、この国の若者に仕事がないことを訴えた。また、この移住者集落では男は木彫り、女はバスケット編みで現金収入を得ていたが、その売れゆきが平均1日に50~60キナ (7000~8000円)程度で、人口数百人の集落としてはきわめてわずかであるため、この市場開拓の問題をも訴えた。筆者を通して、こうした実情を日本人達にも伝えてほしいということが彼の願いでもあったと思う。

第3の人は筆者がバスを待っているとき、たまたま話かけてきた男の訴えである。彼は翌日いきなり私達の船に木彫りを持ってやって来て、それらの木彫りを筆者へのプレゼントとして与えたあと、彼の集落でも木彫りを作っているがそれを売りたいこと、集落内では日々の食物を買う金にも困っていることなどを筆者に訴えたのである。

この国では、たしかに田舎に帰れば自然の中の食糧がないことはないのであるが、ウェワクのような都会では自然物に依存する生活はできないので、どうしても現金収入が必要なのである。しかし、仕事の機会も少くそれがなかなかできないのが実情なのだ。

以上の様な仕事のなさ、都会生活の苦しさ、手工芸生産物の販路のなさ、さらにはその原因の一部かも知れない国内社会構造の問題等はP.N.G.だけの問題ではないかも知れない。しかし、直接対面して訴えられた筆者としては、そ



農村での聞き取り調査



漁村での聞き取り調査



セピック河をカヌーで進む子供達



海藻採取

の訴えは、とくに第2、第3の人の場合は強烈であった。また、以上の声が、今回の調査旅行で筆者が面会した数十人の現地人の中で、最も真剣に訴えられた「声なき声」であったことをここに報告しておきたい。こうした問題が解決されるのはいつの日のことであろうか。

TRIP TO PAPUA NEW GUINEA

アントニオ サラヴィア (農学部)

From the 1st of November until the 6th of December, the survey party of the South Pacific Research Center of Kagoshima University were aboard the Kagoshima Keiten Maru working on the research program planned for Papua New Guinea (PNG). The objectives of the trip were to gain information and experiences about the whereabouts of the people, society and agriculture of PNG.

To fulfill our objectives we, the agriculture team of which I'm proud to be part of, developed a questionnaire to be carried once we got there. However, we did not have a planned work schedule due to a lack of proper communication with our counterpart in Lae and our lack of knowledge of the Wewak area. This lack of planning was easily solved once we got into PNG and met the counterparts. In planning the localities where the survey was carried out, we had to trust completely in the sincerity of our counterparts. This dependence could have made our objectives fail because they (the counterparts) could have shown us only one side of the PNG's agriculture and not a real representation of it. Luckily enough, I do not think this was the case.

In developing the questionnaire, we were surprised to find out that it was too com-

plicated for the normal farmer and that most of the questions could not be answered because they (the farmers) did not know, for instance, their land tenure extension or how much they produced in a given area, etc. This response forced us to change the approach to the problem, finding that it was much better to talk with the farmers while visiting their land and their houses.

On a comparative basis, I found out that the agriculture of PNG is in its beginning; not only in the way of culturing the land, but also in its organization and infrastructure. Farmers of PNG do not count with storage structures, appropriate transport, animals for tilling land, very little machinery and commercialization systems. Yet, it was interesting to find that their products were extremely more expensive compared to the prices in other tropical countries.

It was very delightful to have all the help we had from the people of PNG. Without their help we could not have done much.

The most valuable aspect of the trip to me was the experience I gained in developing a questionnaire; communicating with people with different values, not only in PNG, but also aboard the ship; etc. The experience gained could not be learned from books nor could it be transmitted in all its magnitude. Therefore, I think this opportunity should be given to many other students at the University, not only from the agriculture department, but also from other departments.

専任教官出張記録

オレアイ環礁の還流的人口移動から

柄木田 康之

筆者は1988年からミクロネシア連邦ヤップ州の離島オレアイ環礁の調査を継続している。これまでに1988年1月から6月および、9月から11月、また1990年5月から1991年4月と延べ19カ月の調査を行った。1988年の2回の調査はトヨタ財団の研究助成を受けた。この調査はヤップ州の離島の伝統的社会構造が、1960年代以降の近代化過程の中で、どのように変化しているかを探ることを目的としており、特に公的教育制度の浸透にともなう若年層の一時的な離村(還流的人口移動)と親族集団編成の変化に主眼をおいている。現在調査は数回のセンサスの実施、基本的な民族誌的調査項目の聞き取り、系譜の収集、リネージ・レベルの土地保有史、ライフ・ヒストリー・マトリクスによる個人レベル移住史の収集を終えた段階である。

オレアイを調査して、すぐに感じることは人々の出入りの激しさである。オレアイ環礁で筆者が住み込んだフララップ島には、1988年5月のセンサスで、448人の人口(de facto)があった。しかし、この時点でフララップ島の者であると見なされている者は714名であり、このうち非移動人口(フララップ島で生まれてフララップ島に居住している者)は253名にすぎず、転入者が195名、不在人口が266名に達した。しかもこれは、時間の流れの一断面にすぎないセンサス資料によっているので、島外居住の経験のある人々はこの数字をはるかに上回る。実際、改めてセンサスを試みると、世帯成員の出入りにあんぐりとさせられる。

人口移動の要因には「近代」的なものと「伝統」的なものを見いだせるかのようである。就学と就労は「近代」的なものの代表であろう。5月と8月には学校の夏休みと、教員の再教育

のため、中高生と教員が大移動を行う。また高等教育をへて公的な職に就いた者は両親を町へと引きつける。私が最初に聞き取りを試みた小学校の先生は、息子がグァムで職を得ているため、今はグァムにいるという。フララップの首長の一人は、やはり息子がヤップで職を得ているため、連絡船が出るたびほとんどといていほほど、ヤップとオレアイの間を往復している。

これに対し、「伝統」的な親族間の紐帯も人口移動の誘因として大きな役割を果たしている。親族の病気は人口移動の大きな機会である。ある人が病気治療のためにヤップに行くと、4、5名以上の近親者が患者に付いて行き、病院の中庭や町で職を得ている親族の家に泊まり込む。また見知らぬ若者がいるので話を聞いてみると、ヤップ州を出て短大や大学で勉強していたが、島で近親者が病気になったため、島に戻ってきたという。連絡船の乗組員も、船がオレアイを訪れたとき、近親者が病気でいると判れば躊躇なく船から飛び降りる。

還流的人口移動論の中で、「近代」的要因が遠心力として、「伝統」的要因が求心力として働き、個人はこの二つの力に挟まり還流するとされる定式がある。しかしオレアイではこのような単純な二分法は成立しない。両者の相互作用には二つの方向性が見られるからである。実際、病気の親族のために個人が職場や学校から戻る例や、職を得た子供のもとに移動する親の例は、先の定式によく当てはまる。しかし病気の親族の世話をしにヤップに来ていた者が、そのまま職に付いて留まったり、奨学生として選ばれヤップを去る時、「近代」と「伝統」は共に遠心力となっている。

ソロモン諸島での調査

中野和敬

1989年の2～7月と1990年の9月～1991年の1月の二度にわたり、ソロモン諸島で焼き畑の生態学的調査が実施できた。ここでは、それに至るいきさつとその模様について述べることにする。

ソロモン諸島はパプアニューギニアの東にある列島を主領土とする国で、以前は英国の保護領であったが、1978年に英連邦内にとどまった状態で独立し、国際連合の加盟国ともなった。全領土の総面積は2万8千余平方キロで日本の四国の約1.6倍であるが、総人口は30万人をやや越える程度であり、平均人口密度は平方キロあたり11人位で、日本人の感覚では過疎の国と思われるであろう。けれども、近年キリスト教の浸透とそれに伴う社会情勢の変化により、人口分布の偏在化が顕著となり、この国の農業の基本形態である焼き畑の休閑期間の短縮化が進んでいる。そのような傾向の最も著しい地域はソロモン諸島の中でもマライタ島北部であり、そこでは休閑期間が数年にまで短くなった事例が数多く報告されている。そこで当然、焼き畑の土壌肥沃度も低下するなど、由由しい事態が目立ち、そうした問題の解決の必要性をソロモン諸島農務省幹部が痛感するに至った。ところが同国の焼き畑に関する基礎的研究は非常に遅れており、しかも同国には研究計画と調査が立案実施できる人がいないので、理科系の訓練を受けた外国人研究者による基礎調査が企図され、小生が同国農業研究場の顧問として協力するよう要請された。けれども、同国自身には研究費の予算が皆無で、小生に対する資金援助はなにもなかった。そこで、一部を福武学術振興財団から研究助成金を得るなど、渡航費を含む全資金を工面して二度にわたり現地調査を実施したしだいである。

焼き畑の基礎的研究がなかなか進展しない主な理由のひとつに、不便で研究施設もない村に何か月も滞在しないと、よく実態がつかめない

という事情がある。都会生活があたりまえと心得ている大方の研究者は、文化人類学者と同様の生活を強いられる現地調査に尻ごみをしがちである。けれども、小生はそのような調査を苦にしないので、今回も、マライタ島北部の三つの村に合計5か月近く住みこんで実態調査と必要なサンプル採取を行なった。

焼き畑とは簡単に言うと、ひと区画の土地を作物生産と休閑を交互にくりかえして利用していく農業様式であり、人間の側を中心にすれば、畑を長くても数年ごとに移していくことになる。そのために、英語では、この農業様式のことを移動農業とも呼んでいる。森林地帯では、休閑期間を十分に長くとり、その間そっとしておけば、成熟した林が再生することになり、その林を破壊して焼き払った後に造成する畑の土地生産性も満足できるレベルに復するが、休閑期間が社会的情勢の変化などにより、数年以下にまで短縮されると、それまでの農法ではさまざまな面で困難が生じる。従って、焼き畑の生態学的研究で重要なのは、作物生産期よりも、むしろ休閑期の土地および植生の状況変化の把握である。何年もひとつの村に住みこんで休閑期間におこる事象や状況変化を追跡するのが理想ではあるけれども、普通はそうもいかないから、住民が利用している土地の履歴を聞きとることが必要となる。本当のことを正直に言うてもらうには村人との信頼関係が必須なので、その人びとの文化の理解から始めざるを得ない。

以上に述べたような調査を行なう上で出会う困難のひとつに村人の時間認識のあいまいさがある。一年中気温が同じで、雨の降りかたにも季節差があまりないので、記憶している1年のふしめはクリスマスとイースター、それに、ごく少数のイエス・キリストの直弟子の記念日くらいしかなく、何か月前の事象かさえも確定するのにひと苦労することがままある。

南太平洋海域研究センター研究会発表要旨

第25回

1991年1月21日

最北に分布する食果性 エラブオオコウモリの生態

船越 公威 (鹿経大)

トカラ列島および口永良部島に生息するエラブオオコウモリ *Pteropus dasymallus dasymallus* は、オオコウモリ科の中で最も北に分布する亜種である。口永良部島での調査結果から、採食場所への飛来開始時刻は周年を通じてみれば日没の平均41分で、飛来後まもなく採食行動がみられ、摂食は日没後の数時間に集中していた。午後0時以降には活動が低下し始め、採食行動も少なくなり、断続的な休息または睡眠の時間が長くなっていた。特に、秋-冬季における夜間の睡眠時間は春-夏季に比べて一層長かった。

エラブオオコウモリの食物をみると、果実への依存度が高く、その被食樹種のうちイチジク属では各種の株毎に結実期が異なり、他種では種によって熟果期が特定の季節の数カ月に限られていた。すなわち、周年をみれば両グループによって相補的に熟果が供給されている。春季には花、夏季では昆虫の摂食が目立っていた。葉の摂食は少量ではあるがほぼ周年みられた。以上の多様な食性は、熱帯のオオコウモリではみられず、暖温帯に分布する本種の特性である。

K班・V班の共催のもとに行われた。東南アジアのイスラーム教徒人口は1億数千万人にのぼり、インドネシアは世界最大のイスラーム教徒を抱える国家であるにもかかわらず、このもっとも日本に近い地域のイスラームの存在に気づいている日本人は意外に少ない。本シンポジウムは、一般に近寄り難いと思われているイスラーム世界を地理的に近い東南アジアから接近して考えようという趣旨で企画し、イスラーム教徒人口の多い島嶼部の三カ国を理解するキーワードをそれぞれ選んだ。イスラームを基本とした国民国家を目指すインドネシアでは教育、マレーシアではイスラーム教徒マレー人が多数居住する農村、フィリピンでは古くから海上で活躍した海洋民に焦点をあてて議論を進めた。

趣旨説明……………早瀬晋三 (教養)

報告1 インドネシアのイスラーム: 教育

……………西村重夫 (九大)

同上 コメント…西野節男 (東大)

報告2 マレーシアのイスラーム: 農村

……………桑原季雄 (教養)

同上 コメント…富沢寿勇 (静岡県立大)

報告3 フィリピンのイスラーム: 海洋民

……………床呂郁哉 (東大)

同上 コメント…早瀬晋三 (教養)

総括……………中村光男 (千葉大)

第27回

1991年3月18日

南太平洋と第2次大戦

米盛 亨 (水産学部)

南太平洋地域には45~50年前の激しい戦闘という歴史が刻まれている。アジア大陸にはじまった日本の侵略行為は真珠湾攻撃と東南アジア・オセアニア海域制覇という事態に拡大し、多くの諸国を悲惨な戦場に変えた。第2次世界大戦

第26回

1991年2月1日

シンポジウム 「東南アジアのイスラーム ——教育、農村、海洋民——」

早瀬 晋三 (教養)

本シンポジウムは、本センター主催、文部省科学研究費重点領域研究「イスラムの都市性」

は連合軍によるこれらの諸国の奪還と解放によって終結したものの、戦争体験者として当時の体験をリアルに整理・紹介し、戦争の反省のみならず、これらの諸国の発展のための援助の必要性を強調する。南太平洋海域研究センターではこの地域を調査し総合的な研究を推進しているが、過去を踏まえた科学技術での貢献も極めて重要である。

第28回 1991年4月3日

チリの政治経済発展と大学

Augusto Parra Munoz (Concepción大学)

チリは1818年の独立以来民主主義共和国として繁栄してきた。途中2度この体制が脅かされ、特に1973年以降クーデターによる軍事政権は17年も続いた。1989年に全国民、特に学識者・政党・教会等の努力が実って、大統領・国会議員選挙が行なわれ民主体制が復活した。現在為すべきことは山積しているが、一刻も早く民主主義諸制度の整備を行なわねばならない。

さらに、経済成長の促進と国民への還元が重要課題である。近年の経済成長率は年5%程度で、1990年の国民1人あたりの年収は2,100ドルと見積もられているが、今後、開放市場型経済・輸出と外貨獲得・国内財蓄を拡大推進しなくてはならない。幸いチリは各種資源に恵まれている。天然資源の将来は明るく、今後その工業的付加価値を増大させる必要がある。また水産資源と林産資源も需要待ちの状態にある。農業資源は地理的要因、とりわけ気候・気象条件を克服する課題を抱えているが、果実栽培の充実などに期待できる。人的資源についても展望がある。元来チリ人の技能は比較的高いと評価されており、諸外国からの技術移転の際の吸収同化も容易と考えられる。

政治行政上の問題は首都サンチャゴに政治経済管理機構が一極集中していることであり、人的資源と権限の地方委譲が必要である。この改革には大学の役割が極めて重要である。特にコ

ンセプション大学は、地方大学の草分的存在であること、8番目の州都に存在すること、さらにインフォメーションセンターとして、また専門職と技能職の養成機関としての実績があることから、民主主義共和国チリの発展の担い手として強く期待されている。(根建要約)

第29回

1991年4月12日

平成2年度特定研究 「パプアニューギニアの人間と環境」 報告会

演題：

1. 農業班の調査概要
林 満 (鹿大農)・富永茂人 (鹿大農)・坂田祐介 (鹿大農)・田浦 悟 (鹿大農)・中村志道 (鹿大農)
2. パプアニューギニアの果樹生産の現状と将来
富永茂人 (鹿大農)
3. 作付体系の現地調査並びに地力に関する2, 3の考察
田浦 悟 (鹿大農)・林 満 (鹿大農)・宮内信文 (鹿大農)
4. 伝統社会システムとその変容——土地制度を中心にして——
皆村武一 (鹿大法文)
5. Port Moresby 南東の Padana Nahua 海域における環境
大木公彦 (鹿大理)・四宮明彦 (鹿大水産)・棚部一成 (東大理)
6. Port Moresby 南東の Padana Nahua 海域におけるオウムガイ捕獲記録と海底写真
四宮明彦 (鹿大水産)・棚部一成 (東大理)・塚原潤三 (鹿大理)・大木公彦 (鹿大理)
7. オウムガイの生殖に関する基礎的調査
塚原潤三 (鹿大理)
8. PNG沿岸海域の無機栄養塩類について

井上晃男 (鹿大南海研)・渡辺俊輝
(鹿大水産)

9. 海洋生物の生物活性物質の検索, 単離,
および科学研究 (1) パプアニューギ
ニア産軟体サンゴと海綿に含まれる魚
毒活性成分
内尾康人 (鹿大医短)
10. 北緯24度から赤道海域までの植物プラ
ンクトン色素と有機懸濁物の分布
市川敏弘 (鹿大理)・鈴木尚志 (鹿
大理)
11. パプアニューギニアにおける成人T細
胞白血病抗体の検索
寺師慎一 (鹿大南海研)

第30回

1991年5月28日

南タイ・国境県地域の現状： ムスリム社会の変化と政治動向

橋本 卓 (北九州大)

最近のタイの経済発展は著しく、その影響は地方レベルでも様々な形で現れている。マレー系ムスリムが人口の60%~80%を占めるタイ南部の国境県 (4 県) もその例外ではなく、前回調査時 (1983年) と昨年12月の再調査の結果を比較すると、わずかの間にもかかわらず社会経済の諸側面において大きな変化がみられる。さらに、分離独立運動を唱えるムスリムゲリラの活動や政府の各種政策に対する一般ムスリム住民の反応も、様変わりした感があり、政治面でも多くの変化が生じている。こうした動きの要因は何か。またその過程と影響はいかなるものか。これらの点を、経済発展と政治的安定、タイ語教育の進展とその影響、マス・メディアとくにテレビの普及と情報の多様化、政治参加と自治の動向などを中心に、ムスリム社会の変化の諸相を分析することによって明らかにすることを試みた。そして最後に、麻薬に代表される社会問題や根強い宗教問題を絡めながら今後の

南部国境県の政治を展望した。

第31回

1991年6月24日

中国雲南省における家畜の品種分化について

橋口 勉 (農学部)

中国は、世界でも家畜化と家畜飼養文化に関して古い歴史を有する国である。中国の西南に位置する雲南省は、在来家畜とその野生原種の種類と数が最も豊富であり、またミャンマー、ベトナムおよびラオスと国境を接するところから、他の家畜化センターである東南アジアや南アジアを結ぶ重要な地域である。今回は、国際学術研究による中国雲南省における在来家畜の遺伝資源としての特性および野生原種との相互関係について、学術調査が実現するまでの中国側との交渉の経緯を含めて紹介した。

第32回

1991年7月12日

近世江南農村土俗信仰雑考

濱島 敦俊 (大阪大)

中共支配下の思想・学術政策は、多くの領域で学問の空白を生んできた。近世社会経済史にもその影響が深く現れ、人文地理学・社会学・宗教学・文化人類学の50年代後期における廃絶は、農村の居住環境・社会関係・社会組織に対する、中国人歴史家の驚嘆すべき無関心に結果している。その空白をなんとか埋めるべく、十年来の文献史料探索と、ここ数年の現地調査をもとに、江南デルタ農村の共同信仰を追跡中であり、その一端を紹介した。

第33回

1991年9月9日

柑橘の落葉・落果とカルシウム

岩堀 修一 (農学部)

エスレル (2-chloroethylphosphonic acid)

による柑橘の落葉・落果は酢酸カルシウムの添加で防がれることを見出し、酢酸カルシウム添加エスレルの樹上散布が落葉・落果の心配なしにポンカンやキンカンの着色を促進することから、この方法を早期出荷のため実用化した。このカルシウムの効果は組織の老化を遅らせるためであると考えられた。

調節蛋白質カルモデュリンとカルシウムの複合体の作用を阻害するトリフルオペラジンやW-7は柑橘の葉や果実のexplantの離落を促進し、これはIAAや酢酸カルシウムの添加によって抑制された。このことはカルモデュリンが離落に関与していることを示唆するものである。

固定液のグルタルアルデヒドとオスミウム酸にアンチモンを添加することにより、細胞内カルシウムを透過型電子顕微鏡で検出する方法を用い、柑橘の葉の離層部細胞内のカルシウム分布を調べ、離落におけるカルシウムの役割の解明を試みているが、その予備的な結果を報告した。

シンポジウム「地震と火山」

大木 公彦 (理学部)

島原の雲仙火山が噴火して、火山噴火予知の重要性が叫ばれている折、鹿児島大学南太平洋海域研究センター主催のシンポジウム「地震と火山」が、平成3年9月23日(月)秋分の日午後1時から5時まで鹿児島県黎明館講堂で開催され、160名を超える参加者が熱心に講演を聞きました。前半は、地震の立場から3人の講師の方々が、後半は、火山・熱水鉱床の立場から2人の講師が講演をされ、2人のコメンテーターがコメントされました。

私たちが生活している“南西島弧”(鹿児島から沖縄へ至る島々の列およびその周辺海域)が、地球規模で見ても極めて特殊で重要な場所であること、地震・火山に対する研究・観測の必要性を再認識させられた素晴らしいシンポジ

ウムでした。

日本の海洋開発と潜水病

川 眞人 (西日本医学研究所)

日本の海洋開発は科学技術庁および海洋科学技術センターを中心に研究が行なわれてきており、近年では深海6500の進水をみたことでも知られている。1973年以来、海洋科学技術センター研究委員として、日米天然資源開発会議(U. J. N. R)の潜水技術専門部分のメンバーの一員として、日米の海洋開発プロジェクトに関与し、潜水病の研究を行なってきたので報告する。1960年代は、飽和潜水技術を主体とした海底居住計画が行なわれたが、シーラブⅢの失敗より、水中エレベーター(SDC)と船上高圧タンク(DDC)を組み合わせた深海潜水が行なわれるようになり、私達も対馬沖にてナヒーモフ(ロシア戦艦)のサルベージ(海底94m)に応用してみた。

日本では、400m、米仏では600mの潜水に成功しているが、深海潜水にも生理学的な問題点も多い。一方、日本の潜水漁民は、50%におよぶ骨壊死が発症しており、潜水に伴う潜水病の問題点も大きい。骨壊死のレントゲン分類、経年的変化、原因および治療法について述べた。ウィスコンシン大学と共同研究している羊の骨壊死についてもその意義についてふれた。潜水病と骨壊死の予防法について我々の剖検例と実験例とから考察した。

シンポジウム 「熱水系に対するマグマの寄与」

根建 心具 (教養部)

マグマの周辺には地熱や熱水鉱床が形成されるが、マグマと熱水の関係について、マグマは

地下水を暖め循環させる熱源との考えと、マグマが熱水を放出しているという考えがあり、現在の学会を2分するほど大きな問題である。これに直接メスを入れ解答を得るため日米セミナーとして双方の考えをもつ研究者が一堂に会し、1991年11月10日から1週間、合宿形式で徹底的な議論を行なった。南海研センターは共催という形で協力し、日米セミナーの性格上、専任・兼務教官への参加の呼びかけは2カ月前に行なって参加者を募集し、討論の期間中の随時参加は認めなかった。日本から18名、アメリカから13名、カナダとニュージーランドから各2名、旧ソ連およびフィリピンから各1名の参加があった。議論は次の5つのテーマに整理され、日中はそれぞれのテーマについて数件の口頭とポスターによる発表がなされ、発表の後はテーマ毎に分れて、これまで明らかにされたことと未解決の問題は何かが深夜まで討論された。討論の結果は近く公表される予定である。

1. マグマと平衡にある熱水の化学組成
2. マグマ中の揮発性成分の性質と熱水分離のプロセス
3. マグマ/熱水系の流体運動のメカニズム
4. 活動中の地熱系におけるマグマ起源の熱水の重要性と特徴
5. 化石地熱系におけるマグマ起源の熱水の重要性と特徴

第37回

1992年1月13日

トカラ海峡における黒潮のモニター

前田 明夫 (工学部)

黒潮や湾流のような大海流は大量の熱を赤道付近から北に運んで、それを大気に与え、大気の運動を維持するのに寄与している。これらの大海流は亜熱帯循環の西端強化流であり、その循環は主として偏西風と貿易風によって維持されている。すなわち海洋の表層大循環と大気の大循環は相互作用している。人間活動にともなう気候変動を予測するには数年から数十年の時

間スケールの大気海洋間の相互作用を理解する必要がある。

西端強化流である黒潮には北太平洋亜熱帯循環の変化が増幅されて現れる。そこで、黒潮の流量と熱輸送量をモニターし、大気の運動と比較することによって大気と海洋との相互作用を理解できる。黒潮の流量や熱輸送量をモニターするには、黒潮の流路が大幅に変化しない、境界が分かりやすい所が望ましい。これらの条件のもとで最も適したところはトカラ海峡である。我々はこの海峡の黒潮を2日に一度の割合で横断している大島運輸の定期船あけぼの丸に超音波流速計をとりつけて黒潮の流速断面と流量のモニターに着手した。

トカラ海峡周辺には、名瀬、中之島、西之表、枕崎、大泊（大隅半島先端近く）の5カ所に検潮場がある。又、大島運輸の定期船「波の上丸」が2日に一度の割合で黒潮を横断しながら表面水温を測定している。これらの資料を解析した結果、黒潮のトカラ海峡内の流量の配分と黒潮の水温フロントの15日から50日程度の時間スケールの南北移動と密接な関係があることを見いだした。フロントが北上するに従って名瀬と中之島の間流量が減少する傾向が名瀬と中之島の水位差に現れ、中之島と佐多岬の間流量が増加する傾向が中之島と枕崎や大泊や西之表などとの間の水位差に現れている。又黒潮の水温フロントの北上は、鹿児島湾への外洋水の流入を強め、大隅分枝流を強化していることを水位差の時系列から見いだした。これらの結果は、トカラ海峡周辺の検潮場の水位変動に黒潮の流量変動の影響が十分に反映していることを示唆し、これらの検潮場の水位の時系列を遡って活用することによって数年間の黒潮の流量の測定により数十年の時間スケールの黒潮の流量の変動の特徴を知ることが可能であることを示唆している。

平成2年度鹿児島大学公開講座講演要旨

「南太平洋—南西諸島と熱帯とのつながり—」

平成3年8月6日～8日

南太平洋海域研究センターはその第4回公開講座を奄美大島名瀬市の奄美博物館で平成3年8月6日(火)から8月8日(木)の3日間にわたって開催した。

奄美で開催する公開講座は、昭和63年8月、南太平洋海域研究センター発足当時に、笠利町で行われたものに引き続き二度目だが、今回は「南西諸島と熱帯とのつながり」というサブ・テーマがしめすように、プレート・テクトニクス論から見た南西諸島、東南アジア島しょ地域から南西諸島への植生分布の変化など、太平洋の一部としての南西諸島という立場から、地元奄美が太平洋のなかでどの様に位置づけられるかを中心とした講義が行われた。講師陣にはセンターの専任・兼務教官7名に、地元から世界自然保護基金南西諸島特別委員会委員の大野隼夫氏が加わった。

個々の講義の内容とは別に、視聴覚教材を駆使した講義を通し、地域を学際的に捉えようとする講師陣の熱意は、お年寄りから高校生までという多彩な背景を持つ受講生にも伝わり、質疑応答を含め有意義な時間を過ごせた。このような成果に当たって、奄美振興研究協会ならびに奄美博物館等、地元の方々の労に感謝したい。

南海研センター、柄木田 康之

熱帯・亜熱帯の病気と生活

寺師 慎一(南海研)

熱帯・亜熱帯の病気には、過去において日本でも一般的であったが、今は見られなくなった感染症が多い。国の経済力の不足、また教育の不徹底が保健衛生面の不備となり、感染症を容易に引き起こすと思われる。

国の財源はパプアニューギニア(PNG)、ミクロネシア連邦(FSM)などはそれぞれオーストラリア、アメリカの経済援助と観光客からの収入によっている。それ以外には、輸出産物で良く知られている、PNGの3C(Copper, Copra & Coffee)、FSMのコショウで収益をあげている。

感染症では経口感染、すなわち下痢症が一位を占め、肺炎がこれにつぐ。乳児死亡率の高いことも発展途上国ではよくみられる。平均寿命はPNGで50歳といわれ、それだけにかん死亡率は低い。がん年齢に達しないことによるが、例外はある。ビンロウ種子を噛む習慣のある国では口腔がん(Betel Nut Cancer)が有名だ。

また、栄養不足も決しておそそかに出来ないものがある。芋類を主食とする生活で、貴重な動物性蛋白は何より得ているのか興味ある問題である。PNGの山間部ではサナギの類、ワラビー(有袋類)、鳥、コウモリ(Fruit Bat)、川魚などを、さらに河川・海岸域ではワニ、カメ、魚介類によっているという。

つぎに熱帯・亜熱帯病で忘れられないのがマラリアである。その種類は三日熱(卵型もある)、四日熱並びに熱帯熱マラリアの四種がある。三日熱(卵型もほぼ同じ)、四日熱は不完全治癒もあり、再発することがある。熱帯熱マラリアは脳性マラリアをおこし死亡することがあり、また抗マラリア剤であるクロロキン製剤に抵抗性を示すものがあり、やっかいである。

外国のこのような現状に接するとき、日本はいかに恵まれた国であるかをいつも感じさせられているところである。

南西諸島と熱帯とのつながり

田川日出夫 (教養部)

南西諸島は大きく分けて、薩南諸島、奄美諸島、沖縄諸島、先島諸島、大東諸島、尖閣諸島に分けられる。薩南諸島までは渡瀬ラインの北側にあり、植物の世界は日華区系に入り、それ以南は東南アジア区系にはいるため熱帯の様相が強くなる。第四紀に繰り返された氷期と間氷期には、南西諸島は、生物が島嶼橋として九州と熱帯を移動する通り道であった。そのために、植物の種多様性は極めて高く（屋久島1389種、奄美大島1129種）、特に、北限及び南限種が両島で多いのも理解することができる。屋久島が奄美大島より種数が多いのは、屋久島の標高が高いためである。渡瀬ライン以南では隆起珊瑚礁が著しく、土壌が本土のものとは異なっている部分がある。小さい島では全体の種数は少ないが、単位表面積当りの種数、つまり種密度は小さい島ほど高く、その上限は凡そ250種/km²（昭和硫黄島）であった。山羊が放牧されている島嶼では、この値が低くなっていて、放牧が種の保存に大きな影響を与えていることが推察される。

植物は常に群落という形をとって行動する。植物の群落の多様性もまた、渡瀬ライン以南で高くなっている。例えば、スタジイ林は、奄美以南ではオキナワシキミースタジイ群集、ケハダリミノキースタジイ群集、アマミテンナンショウスタジイ群集、アオバナハイノキースタジイ群集、スタジイミヤマハシカンボク群集の5種が知られているが、熊毛ではヤクシマアジサイースタジイ群集、ギョクシンカースタジイ群集の2種である。スタジイ以外の種が優占する群落は南にゆくにつれて本土よりは多くなる。台湾、フィリピンと南下すると更に群落の多様性は高くなる。

本土の照葉樹林をつくる常緑の種は、南西諸島を通して北上したといわれる。高い山岳がない南西諸島の島嶼を、高い標高に分布する植物がどのようにして通過したのか興味があるが、

調査の結果、低い島嶼ではゴチャマゼになって分布しており、本土の山岳地で植生帯を作り、分化していることが分った。

リュウキュウアユと南の魚たち

四宮 明彦 (水産学部)

南方海域の大陸や島のまわりにはサンゴ礁が発達しており、その環境に適応した独自の生物群集がある。魚類のうちでもサンゴ礁を主な生活場とするグループをサンゴ礁魚類とよぶ。サンゴ礁魚類はその色彩や模様が派手なものも多いが、この色彩や模様が種内と種間で互いを識別するための信号として機能している例もある。サンゴ礁魚類の代表種について、その生活と繁殖様式を概説した。

アユの分布域は北海道西部以南の日本各地と、中国大陸沿岸部、朝鮮半島および台湾である。奄美大島から沖縄までの琉球列島産のアユは、他地域の集団と比べ、形態・遺伝・行動上の諸形質が異なることが判明し、別亜種＝リュウキュウアユとして記載された（Nishida 1988）。すなわち形態的には鱗数・胸鰭軟条数が少なく「ずんぐり型」であり、行動的には「なわばり習性」が弱い特徴をもつ。洪積世中期に生じていたトカラ海峡によって日本列島の集団から切り離され、約百万年の期間にわたって独自の歴史を持つに至ったと推定される（西田 1987）。

ところが近年の河川環境の劣化により、沖縄本島では既に絶滅し、現在では奄美の住用村役勝川・住用川・川内川・山間川および宇検村河内川に小規模な集団が確認されるのみとなった。琉球列島の河川生物群集の特徴をよりよく認識する上で重要な種であり、その素性がまだ十分に解明されないうちに、生息域の環境劣化と資源数の減少が急速であることから保護対策を必要としている。リュウキュウアユ生息地の現状と問題点について概説した。

奄美の自然史——地球科学の立場から——

早坂 祥三 (理学部)

全長約1100kmの広がりをもつ琉球弧 (南西諸島弧) の中北部に位置する奄美諸島の自然は、太平洋西縁を縁どる弧状列島の成因と深くかかわっている。

海底地形・地質のデータの集積によって、今や世界中の海洋底の全貌が明らかになり、西太平洋の弧状列島の存在が全地球的にきわめて特異なもので、海洋地殻と大陸地殻の力関係を、現在なお進行中の形で理解するキーポイントとして、各国の注目をあびている。

全海洋の海水をとり除いたと仮定すると、そこには起伏にとんだ広大な海底地形が浮かび上がる。その海底地形にもとづいて、海洋は次の三つの大地形区に分けられる：(1)大陸縁辺部、(2)深海底 (深海平原)、(3)巨大海嶺システム。大陸と海盆 (深海底) という地球上の二大領域の間であって両者を結びつける「大陸縁辺部」には、二つのタイプがみとめられる。海岸線→大陸棚→大陸斜面→深海平原と低下してゆく海底地形の途中、大陸斜面と深海平原の間に、海溝をもつタイプ (太平洋型) ともたないタイプ (大西洋型) である。大西洋型の大陸縁辺部には地震が少なく、太平洋型では地震の巣を形成している。太平洋型の内、太平洋西縁をふちどる大陸縁辺部には、弧状の島列 (島弧) が発達し、大陸との間に浅くて広い縁海 (日本海・東支那海など) がある。

奄美諸島は、大陸-縁海 (東支那海)-島弧-海溝という西太平洋特有の組み合わせの中に位置している。このような組み合わせは、東方フィリッピン海の海底を作っているプレートの西方移動にともなって、その先端部が海溝の位置で西方のユーラシア大陸のプレートの下にもぐり込む過程でもたらされたものである。大陸と海盆の間の力関係と、それにもなう地質現象の研究に絶好のフィールドとして注目されている。

一方、奄美諸島を含む南西諸島の島々の地質の研究を通して、2千万年ほど前からの地質構

造発達史が明らかにされているが、これも前述のプレートの沈み込みという現象にともなって生じたものである。また、その間の各時期における海陸の分布図 (古地理図) も描くことができ、これは現在の島嶼部における動植物分布の由来を考える上で重要な手がかりとなっている。

サンゴ礁のなりたち

塚原 潤三 (理学部)

サンゴ礁は熱帯から亜熱帯の潮間帯を彩り、多様な種によって成り立っていると共に、多くの生物にその生息場所を与えてきた。近年地球温暖化に関わる二酸化炭素を吸収する役割が目され、地球環境保護の一環としてサンゴ礁の保護育成に関心が向けられている。

講義ではまず始めにサンゴ礁を形成するサンゴの種類を説明し、それが世界規模でどのように分布しているかを図示して、奄美以南の西・南太平洋が世界で最も豊富で多様なサンゴの生殖する場所であることを示した。次いでサンゴの生殖に関する研究の歴史を概説し、第2次大戦前はパラオにあった日本の熱帯生物研究所が世界の研究の中心であったが、戦争によって中断してしまったことを述べた。近年オーストラリアのグレートバリアリーフで満月に同調したサンゴの一斉産卵が見つかり、次いで沖縄を始め世界の各地で同様な現象が確認され、生殖に関する研究が盛んに行なわれるようになった。しかし、サンゴの種類は極めて多様で、生殖様式も多様である。

我々が沖縄の慶良間諸島で数年来行なってきたエダサンゴ類、キクメイシ類、アザミサンゴ類等の有性生殖と発生に関する研究内容を紹介した。産卵と月齢周期との関係が、種特異的に規則性をもつこと、産卵された浮遊性の卵と精子の塊 (バンドルとよぶ) が海水表面にひろがり (これをスリックとよぶ)、そのなかでの受精から発生のようすを顕微鏡写真などを用いて説明し、発生した幼生が着生する場所を選ぶこと、着生が完了すると変態して小さなサンゴを

形成するまでを紹介した。

奄美大島はサンゴ礁の北限にあたり、極めて多種のサンゴが生息しており、広いサンゴ礁が未だ自然のままに良く保存され、北限のサンゴ礁形成のしくみを調べる絶好の場所である。是非、奄美大島の貴重な「宝」として守っていくことを期待している。

奄美の熱帯・亜熱帯果樹をめぐって

石畑 清武 (農学部)

奄美大島地方は平均気温21.3℃、1月の最低平均気温は11.3℃で(熱帯地方の平均気温26°~27℃)、亜熱帯気候に属する。古くから沖縄(琉球)経由で多くの熱帯・亜熱帯果樹類が導入されてきた。

今日奄美地方でみられる主要な種類をあげる

と第1表のとおりである。

では、奄美大島地方で経済性を含めて栽培がすすめられる熱帯・亜熱帯性果樹はどんな種類が考えられるか? 既に亜熱帯果樹のパッションフルーツ及び熱帯果樹マンゴーは栽培出荷されている。さらに熱帯果樹のパパイア、グアバ、スターフルーツ(ゴレンシ)、カニステル、バナナ、アセロラ、亜熱帯果樹のレイシ、チェリモヤ、アテモヤ等が期待される。

温帯果樹はウンシュウミカンのように単為結果する種類が多いが、熱帯・亜熱帯果樹は虫媒花が多い。開花時に雨を除け、昆虫による花粉媒介又は人工受粉を行うことにより、結果率及び果実品質は高められる。結果率への3~4月の雨の障害は大きい。

台風被害回避策として防風垣(壁)、消風又は防風ネット囲いの効果は大きい。奄美地方は

第1表 奄美地方に栽培されている熱帯・亜熱帯果樹類

No.	和名	一般名及び学名	科名	原産地
1	アセロラ	Acerola, <i>Malpighia emarginata</i> DC.	キントラノオ	熱帯アメリカ
2	アテモヤ	Atemoya, <i>Annona atemoya</i> Hort. ex Wester	バンレイシ	栽培品種
3	アボカド	Avocado, <i>Persea americana</i> Mill.	クス	メキシコ, グアテマラ
4	キイロトケイソウ	Yellow passion fruit, <i>Passiflora edulis</i> Sims f. <i>flavicarpa</i> Deg.	トケイソウ	ブラジル
5	ギュウシンリ	Bullok's heart, <i>Annona reticulata</i> L.	バンレイシ	熱帯アメリカ
6	ゴレンシ	Star fruit, <i>Averrhoa carambola</i> L.	カタバミ	インド, ヒマラヤ
7	シャカトウ	Sugar apple, <i>Annona squamosa</i> L.	バンレイシ	熱帯アメリカ
8	ジャボチカバ	Jaboticaba, <i>Myrcaria cauliflora</i> Berg.	フトモモ	ブラジル
9	シロサボテ	White sapote, <i>Casimiroa edulis</i> Llave et Lex.	ミカン	メキシコ, 中央アメリカ
10	ソッコヤ	Soncoya, <i>Annona purpurea</i> Moc. et Sesse	バンレイシ	メキシコ, 中央アメリカ
11	タマゴノキ	Egg tree, <i>Garcinia xanthocymus</i> Hook.f.	オトギリソウ	インド
12	チェリモヤ	Cherimoya, <i>Annona cherimola</i> Mill	バンレイシ	熱帯南アメリカ
13	トマトノキ	Tree tomato, <i>Cyphomandra betacea</i> Sendt.	ナス	熱帯アメリカ
14	テリハバンジロウ	Strawberry guava, <i>Psidium cattleianum</i> Sabine	フトモモ	ブラジル
15	パイナップル	Pineapple, <i>Ananas comosus</i> (L.) Merr.	パイナップル	熱帯アメリカ
16	パッションフルーツ	Purple passion fruit, <i>Passiflora edulis</i> Sims	トケイソウ	ブラジル
17	バナナ	Banana, <i>Musa</i> cv.	バショウ	中国, ヒマラヤ
18	パパイア	Papaya, <i>Carica papaya</i> L.	パパイア	熱帯アメリカ
19	パラミツ	Jack fruit, <i>Artocarpus heterophyllus</i> Lam.	クワ	インド, マラヤ
20	バンジロウ	Guava, <i>Psidium guajava</i> L.	フトモモ	ブラジル
21	ピグネイ	Bignai, <i>Antidesma bunius</i> Spreng.	トウダイグサ	ヒマラヤ, スリランカ
22	フトモモ	Rose apple, <i>Syzygium jambos</i> (L.) Alst.	フトモモ	熱帯アジア
23	マンゴー	Mango, <i>Mangifera indica</i> L.	ウルシ	インド
24	ヤマトゲバンレイシ	Mountain soursop, <i>Annona montana</i> Macf.	バンレイシ	西インド諸島
25	リュウガン	Longan, <i>Euphoria longan</i> Steud.	ムクロジ	インド
26	レイシ	Litchi, <i>Litchi chinensis</i> Sonn.	ムクロジ	中国南部, ヒマラヤ
27	ワンピー	Wampi, <i>Clausena lansium</i> Skeels	ミカン	中国南部

周年暖い地方であり、鳥及び虫類の被害が大きく、防鳥及び防虫ネットの設置が必要である。

新規事業は既存の企業文化と対立するので必ず妨害がある。これを排除する努力をしてほしい。

奄美の自然と保護への道

大野 隼夫 (世界自然保護基金)

奄美群島は沖縄県や小笠原諸島と共に東洋のガラバゴス、貴重な生物の宝庫と言われている。

世界的あるいは全国的な地図の上では点在でしかないこの島嶼群が何故そう呼ばれるのだろうか。

わかりやすく珍しい動物達の例をあげると、特別天然記念物のアマミノクロウサギ、天然記念物のケナガネズミ、トゲネズミ、ルリカケス、オオトラツグミ、オーストンオオアカゲラなど約10種、その他にも貴重な動物としてアマミヤマシギ、イボイモリ、リュウキュウアユなどがある。

そしてこれらの動物の住家は奄美大島では湯湾岳、神屋、金作原など、主に中部山岳地帯の森林や河川である。

そこには多数の固有植物や南方系で北限の植物が混生する亜熱帯広葉樹林があり、また住用川、役勝川の河口にまたがる広大なマングローブもある。

しかし、近時開発の名のもとにこの山岳地帯の森林が大段的に伐採されつつある。このような状態が続く限り奄美の自然は間もなく回復不可能な事態になることは必至である。

自然の破壊は森林の伐採にはじまり、河川の荒廃、海洋の汚染とつながり、生態系のバランスを消失させ、最終的には動植物の絶滅あるいは衰退を招くことは火を見るより明らかなことである。

いま私達は郷土の貴重な自然を再確認し、シンポジウムやレクチャー、コンフェレンスなどにより、残された国有林をはじめ公有林の保護、河川の保全、海洋の汚染防止に活発な運

動を展開しなければならない。

「人生のために自然があるのではなく、自然のなかに人生がある」ということを心の中に刻まなければならないのである。

南島の衣生活 ——芭蕉布など——

小林 孝子 (教育学部)

九州以南から台湾に至る南西諸島の島々は、古来「南島」と称していた。この南島は亜熱帯に位置するため、各島に産する芭蕉は、島々の生活に大いに利用された。

食用とする実芭蕉(バナナ)、花を鑑賞する^{はな}花芭蕉など芭蕉の種類は多いが、衣料として用いるものは、一般に糸芭蕉と称するリュウキュウバショウで、その幹(葉鞘)の部分から繊維をとった。

方法はまず、長鎌を用いて葉を切り払う。4～5日して根元から切り倒し、葉柄を1枚ずつ剥ぐ。それを小さく束ねて鉄鍋に入れ灰汁で煮る。柔らかくなったら竹製のピンセット状の道具で扱いて繊維を採取し、かげ干しにしたものを割き、つないで糸にする。その糸を織機で織ったものが芭蕉布である。南島には、この芭蕉布製作工程をうたい込んだ作業歌も伝えられている。

この芭蕉布は南島の在来織布であり、すべての人々に用いられていたが、琉球王朝ではその職制による朝衣(宮服)も芭蕉布で製していた。近世には芭蕉当職も置かれ、芭蕉布は王朝の高級衣料にも用いられた。

南島に独特の文化を築いた琉球王朝の工芸品の中には、^{びんがた}紅型や^{かすり}紵、格子や編織など、見事な芭蕉布の染織品があって、今に伝えられている。

17世紀以降、奄美諸島は島津直轄の地となるが、服制はその後も続いて、島役は朝衣を着用した。明治の廃藩置県後には、旧服制は行われなくなったが、人々の衣料は自家製の芭蕉布が主であって、昭和に入り、さらに戦後までも芭蕉布は製作され続けたが、日本の衣料の既製品

量産化が進むに伴い、失われていった。

また芭蕉は衣料としてだけでなく、葉鞘しんの芯は煮て食用とし、葉は本土の柏餅や笹だんご団子のように餅や団子を包んだり、またその団子や赤飯を蒸すときに、蒸籠むいろうの中に敷く布巾ふきんとしても使い、さらに台の上に敷いて料理を盛る皿とするなど、南島の衣・食・住その他の生活に余すところなく有効に活用されていた。この生活の知恵の中から、大量の廃棄物を伴う消費生活の現代が、自然を見直すための示唆を得られないものだろうか。

南海研センターの出版物

Occasional Papers No.21 (1991)

The progress report of the 1990 survey of the research project, "Man and the environment in Papua New Guinea" (ed. Mitsuru Hayashi)

1990年度の特定期研究「パプアニューギニアの人間と環境」は、11月5日から6週間にわたって実施された。その研究成果は、Occasional Papers No.21にProgress Reportとして、14編が編集され、1991年10月に発行された。B5判、xv+65頁。

Occasional Papers No.22 (1991)

東南アジアのイスラーム——教育、農村、海洋民——(中村光男・早瀬晋三編)

本号は本研究センターの主催によるシンポジウム(平成3年2月1日)の記録で、西村重夫(九大教育学部)、桑原季雄(鹿大教養部)、床呂郁哉(東大大学院)の報告、西野節男(東大教育学部)、富沢寿勇(静岡県立大国際関係学部)、早瀬晋三(鹿大教養部)のコメント、および中村光男(千葉大文学部)の総括からなる。B5判、v+80頁。

南太平洋研究11巻2号(1991)

本号には以下の論文が掲載されている。

- Nedachi, M., Malagun, S., Yamamoto, M., Taguchi, S., Shiga, Y. and Higashi, S.: Halogen geochemistry in the Ok Tedi porphyry copper system, Papua New Guinea. 69-81.
- Katayama, T.C.: On the wild rice, *Oryza breviligulata* Chev. et Roehr., collected in Ivory Coast. 83-91.
- Kitano, M., Hayashi, K., Kawashima, M., Tokufuji, S. and Urago, A.: Histopathological analysis of the brain of an acute decompression sickness (DCS) victim. 93-103.
- Mantjoro, E. and Kataoka, C.: Socio-economic characteristics of the skipjack fishery in Indonesia. 105-122.

南太平洋研究12巻1号(1991)

本号には以下の論文が掲載されている。

- Ajisaka, T.: *Cladosiphon novae-caledoniae* Kylin (Phaeophyceae, Chordariales) from New Caledonia. 1-6.
- Akimichi, T.: Sea tenure and its transformation in the Lau of North Malaita, Solomon Islands. 7-22.
- Nagatomi, A., Liu, N., Tamaki, N. and Evenhuis, N. L.: The genus *Systropus* from Japan, Korea, Taiwan and Thailand (Diptera, Bombyliidae). 23-112.

南太平洋研究12巻2号(1992)

本号には以下の論文が掲載されている。

- Nakano, K.: On the vegetational change in fallows at a hamlet in a northwestern region of Malaita, the Solomon Islands. 113-127.
- Yang, D. and Nagatomi, A.: A study on the Chinese Beridinae (Diptera, Stratiomyidae). 127-178.

南太平洋海域研究センター専任・兼務教官の 海外出張及び研修記録一覧表

(1990年12月～1991年11月)

氏名	所属	在外期間	目的国	用件
橋口 勉	農	2.12.7～3.1.7	中華人民共和国	中華人民共和国雲南省における家畜の品種分化に関する遺伝学的調査
田川日出夫	教養	2.12.13～2.12.30	インドネシア	次期野外調査(海外調査)の打合せと打診
井上 晃男	南海	3.1.29～3.3.4	タヒチ(仏領ポリネシア)	シガテラ鞭毛藻の生態とその分離培養
片岡千賀之	水産	3.2.10～2.17	フィジー	「南太平洋ラグーン域の社会生態と地域計画」(国際学術研究)
鈴木 英治	教養	3.2.24～3.14	インドネシア	国際学術研究「さまざまな管理段階にある熱帯フタバガキ多雨林の構造と更新動態」の研究打合せ
早瀬 晋三	教養	3.2.25～4.17	アメリカ合衆国	日本のフィリピン占領期に関する史料調査及びアメリカ・アジア学会出席
坂田 裕介	農	3.3.1～7.16	中華人民共和国	湘潭大学との学術交流
川村 軍蔵	水産	3.3.3～3.10	アメリカ合衆国	水環境の異臭に関するシンポジウム出席
市川 洋	水産	3.4.8～4.15	ドイツ連邦共和国	第8回世界海洋循環実験海洋観測計画委員会に出席
田川日出夫	教養	3.4.19～4.23	アメリカ合衆国	日米科学セミナー計画の打合せ
岩堀 修一	農	3.4.27～5.14	中華人民共和国	中国華中農業大学において柑橘学の講義及び柑橘の調査
新田 栄治	教養	3.5.7～5.16	タイ	共同研究打合せ及び調査申請手続き
湯川 淳一	農	3.5.26～6.4	アメリカ合衆国	第17回太平洋学術会議に出席・座長・講演及び虫糞の分布調査
田川日出夫	教養	3.5.26～6.4	アメリカ合衆国	太平洋学術会議出席並びに発表
山根 正気	理	3.5.26～6.4	アメリカ合衆国	第17回太平洋学術会議での講演、並びにエクスカージョン
佐熊 正史	歯	3.5.28～6.7	アメリカ合衆国	アフリカ原住民の歯牙人類学的共同調査
田島 康弘	教育	3.5.30～6.10	アメリカ合衆国	社会地理学関係者との情報交換および資料収集
衛藤 威臣	農	3.6.8～6.28	ドイツ、チェコスロバキア、ルーマニア	欧州植物育種学会ネギ属シンポジウム出席と研究所訪問及び材料収集
小沢 貴和	水産	3.6.11～7.12	グアム(アメリカ合衆国)	水産専攻科生に対するまぐろ延縄漁業実習並びに航海運用学実習、水産学科生に対する漁業実習並びに外国寄港地における漁業に関する施設見学
早瀬 晋三	教養	3.6.23～7.3	香港	国際アジア歴史学者会議及びオーストラリア・アジア学会出席発表
湯川 淳一	農	3.7.2～7.26	インドネシア	論文博士号取得希望者に対する研究指導
前田 明夫	工	3.7.15～7.21	マレーシア	拠点大学方式によるマレーシアとの海洋科学に関する学術交流の打合せ
鈴木 英治	教養	3.7.15～10.17	インドネシア	「さまざまな管理段階にある熱帯フタバガキ多雨林の構造と更新動態」の研究
佐熊 正史	歯	3.7.23～8.6	大韓民国	韓国出土古人骨の人類学的共同調査
大塚 裕之	理	3.8.12～8.28	台湾	台湾の更新世及び完新世人骨研究(国際学術研究)の現地調査及び資料収集
内尾 康人	医短	3.8.13～8.22	ハンガリー	第33回国際純正応用化学連合会議出席と研究発表

氏名	所属	在外期間	目的国	用件
市川 洋 田島 康弘	水産 教育	3.8.13～3.9.9 3.9.5～ 9.23	オーストラリア ポーランド	西部太平洋における海洋大循環の研究 第2回ポーランド、日本地理学セミナー出席及び資料収集
前田 明夫 富永 茂人	工 農	3.9.7～ 9.17 3.9.8～ 9.21	中華人民共和国 アメリカ合衆国	西太平洋における気候変動の共同研究 国際学術研究におけるジョージア大学との共同研究
新田 栄治	教養	3.10.5～ 10.10	タイ	発掘による考古学出土品の受取り及び調査打合せ
岩川 哲夫	理	3.10.7～ 10.14	中華人民共和国	国際学術研究大学間協力研究による共同研究
仲田 浩三	教養	3.10.7～ 10.22	インドネシア	インドネシア共和国東部ジャワ州の古代遺跡の調査
重見 之雄	水産	3.10.18～ 10.28	インドネシア	インドネシア辺地における沿岸資源の利用管理制度に関する研究
片岡千賀之	水産	3.10.18～ 10.28	インドネシア	インドネシア辺地における沿岸資源の利用管理制度に関する研究
市川 洋 中野 和敬	水産 南海	3.10.21～ 10.27 3.10.26～ 12.6	アメリカ合衆国 ソロモン諸島、パプア ニューギニア	世界海洋循環実験海洋観測計画委員会出席 共同研究準備及び南海研特定研究「パプア ニューギニアの人間と環境」による調査研究
寺師 慎一	南海	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
柄木田康之	南海	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
内尾 康人	医短	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
林 満	農	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
皆村 武一	法文	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
田島 康弘	教育	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
八田 明夫	教育	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
市川 敏弘	理	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
岩川 哲夫	理	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
湯脇 泰隆	水産	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
川村 軍蔵	水産	3.11.1～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
新田 栄治	教養	3.11.4～ 4.1.31	タイ	「タイ東北地方における先史時代生産遺跡の発掘調査」(国際学術研究)の実施
山尾 政博 井上 晃男	水産 南海	3.11.4～ 3.12.3 3.11.9～ 12.6	タイ パプアニューギニア	文部省国際学術調査実施 南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究
増田 育司	水産	3.11.13～ 11.26	中華人民共和国	乗船実習指導
市川 洋	水産	3.11.13～ 11.26	中華人民共和国	乗船実習指導
前田 明夫	工	3.11.13～ 11.26	中華人民共和国	青島海洋大学との東シナ海共同海洋観測
根建 心具	教養	3.11.18～ 12.6	パプアニューギニア	南海研特定研究「パプアニューギニアの人間と環境」による調査研究

掲 示 板

日本熱帯生態学会と TROPICS

鹿児島大学で編集されている新しい学会誌

日本熱帯生態学会は1990年の夏に結成されたまだ若い学会です。熱帯地域は、いわゆる開発途上国である国がほとんどで、自然の研究も人間生活や社会についての研究も温帯圏ほどは精緻ではありませんが、環境保全や人類の生存にとっての多くの問題がまき起こっている地域にあります。この熱帯の生態学的な研究は、多様で複雑な相互関係のもとで運動している熱帯の実体を学問的な生態学の狭い領域からだけではなく、生態学の重要な基盤となる正確な事実や現象の記載から、応用生態学の分野、さらにその展開された人間社会や人間そのものの研究にいたるまでの広い分野を包含するような地域研究を基盤にして展開されなければならないでしょう。日本熱帯生態学会は「熱帯地域研究」の広い枠組みで研究の諸分野を総合して、専門性に研ぎすまされ、ややもすれば閉じられる傾向の強い現代科学の諸領域相互を開き、情報の

交換を進めることも重要な目標の一つとされています。

そのような学会で編集発行されているのが TROPICS です。現在までに1巻3号まで刊行されていますが、年4回発行の学会誌として準備されてきたものです。論文は生態学に専門・特化したものだけでなく、生態学に関連する諸分野、たとえば生物の分類学、民族学、社会学関係のものも掲載されていますし、医学や人文・社会科学関係の論文であっても研究対象地域が熱帯（南西諸島までを含む）であり、何らかの生態学的な問題意識のあるものであれば広く掲載していくというのが編集の基本方針です。TROPICS の編集事務はどうしたことか鹿児島大学に押しつけられてしまいました。新しい国際的な学会誌を中央から離れた鹿児島などで編集・発行するのはなかなかの冒険ですが、なんとか雑誌のスタイルを決め発行にまでこぎつけたところです。

日本熱帯生態学会の年会費は個人会員が8000円です。会員加入の申込についての問い合わせは理学部生物 堀田満（内線）4370（日本熱帯生態学会編集委員会委員長）におねがいします。

（理学部・堀田満）



南海研だより No. 22 平成4年2月28日発行

発行：鹿児島大学南太平洋海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話0992(54)7141（内線）2058

ファクシミリ 0992（56）9358